アーカイブ新聞 (2014年1月31日 第717号)

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*登録有形文化財に答申された国立天文台ゴーチェ子午環第一(南)子午線標室

2013年11月15日の文化庁文化審議会で国立天文台の7件の建造物が新たに登録有形文 化財として文部科学大臣に答申された。国立天文台にはすでに登録有形文化財になってい た太陽塔望遠鏡(1998 年登録)、第 1 赤道儀室(2002 年登録)、大赤道儀室(2002 年登録) の3件があり、これで同じキャンパスに10件の登録有形文化財となった。今回はその中の 一つ「国立天文台ゴーチェ子午環第一子午線標室(写真1)」について書く。アーカイブ新聞 第 706 号に「登録有形文化財になった国立天文台表門」、第 707 号に「登録有形文化財に なった国立天文台門衛所」、第 708 号に「登録有形文化財になった国立天文台旧図書庫及 び倉庫 | 、第709号に「登録有形文化財になった国立天文台レプソルド子午儀室」、第710 号に「登録有形文化財になった国立天文台ゴーチェ子午環室」という記事を書いた。国立 天文台は 1988 年に設立された文部省直轄の大学共同利用機関であったが、2004 年に設立さ れた大学共同利用機関法人「自然科学研究機構」の一員となった。その前身の一つである 東京大学東京天文台は 1888 年に麻布区飯倉に設立され、東京の中心の麻布から暗い空と広 大な敷地を三鷹村に土地を求め、1924年9月に移転した。1923年の関東大震災で麻布にあ った観測器械は壊滅的な損害を受けたが、ゴーチェ子午環は、麻布の狭い敷地では展開で きず、活躍は三鷹移転後になった。ゴーチェ子午環室が大正13年5月9日竣工、子午線標 室は大正14年2月28日竣工、延べ面積は第一、第二子午線標室34平米である。



写真1 現在のゴーチェ子午環第一子午線標室

子午環は子午線上を通過する天体の時刻と高度を精密に観測し、天体の赤経・赤緯を求め、天文学の根幹である基本星表のデータを取得する望遠鏡である。そのため、望遠鏡が真北、天頂、真南を通る子午線上を観測する性能評価のための設備の一つとして設置されているのが子午線標である。第一子午線標は真南の視準点でありゴーチェ子午環望遠鏡の不動点から真南100mの位置に設置されている。望遠鏡を水平にした時に子午線標が中心に来るように、子午線標室は写真1で見るように地上2階建てになっており、子午線標(写真2)のピアは2階の床を貫いて(写真3)、2階の床とは接していない。また地下においても子午線標室の建物基礎とは分離されており、建物の振動が伝わらないように1階部分には一面に砂が敷き詰めてある。





写真2

写真3

ゴーチェ子午環は1984年に建設された新しい自動光電子午環にその役目を譲り、30年を経ており、第一子午線標室は今では深い森の中に埋もれている。その存在は知ったものに



しか辿り着けない深い森の中にある(写真4)。登録有形文化財になったことから、その整備として、周囲の木々を駆りはらうことも考えられるが、年月経て森の中にひそかにたたずむ姿もまた貴重な事実であり、このまま静かな余生を送らせたいと思っている。

子午線標室の建設時の図面は 国立天文台に残っておらず、今 回、登録有形文化財に申請するに当たっては、日本建築学会の手で実測図が作成された。 図 1 が平面図、図 2 が立面図である。

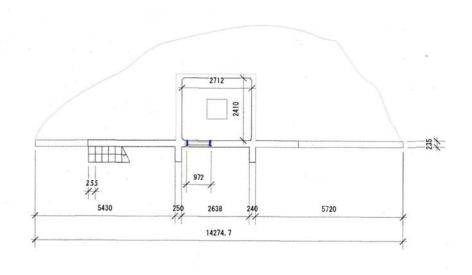


図1 平面図

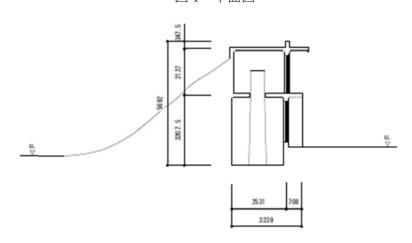


図2 立面図

図 1、図 2 から分かるように子午線標室の裏側は土盛りで覆われており、ピアの温度変化を抑える工夫がなされている。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp